老人保健施設におけるターミナルケアの課題

～A 氏のデスカンファレンスを振り返る～

医療法人社団　三成会
南東北春日リハビリテーション・ケアセンター
近藤雅彦、塩澤真美、矢吹里香

【はじめに】

当施設は在宅復帰強化型施設であり、昨年度の在宅復帰率 71.6%と在宅復帰については運用が進んでいる。一方、ターミナルケアにもあ取り組んでおり、対象者増えてきているが課題もある。

そこで、質の向上のためデスカンファレンスを取り入れることとした。今回 A 氏のデスカンファレンスを通して、ターミナルケアの課題と思われる発言内容を抽出し分析を行った。その結果を報告する。

【目的】

A 氏のデスカンファレンスを通して、当施設でのターミナルケアの課題を明らかにする。

【方法】

期間：平成 28 年 7 月 28 日～平成 29 年 1 月 17 日
対象：A 氏のデスカンファレンスに参加したスタッフ 8 名
倫理的配慮：A 氏の家族に書面で説明し、同意を得た。また、スタッフには事前にデスカンファレンスでの発言がその後の職務に影響がないことを説明し同意を得た。

【実践方法】

逐語録の 48 エピソード中 25 が「後悔や悔い」に関わる発言であった。また、同様のケアの場面であっても、ケアに対するねらい・目標が異なる場合がある事が分かった。

【結果】

この結果は小野らの研究結果と同様の傾向を示しており、死に関わるスタッフは迷いながらケアを行っていると言える。しかし、A 氏に限定して分析したことで「ねらい・目標の共有不足」という課題が明らかになった。要因として考えられるのは、公に話し合う機会が不足していたことである。また、小野らは「なじみのスタッフがチームで関わり続けることは心地よさを提供する事」とも言っている。他職種協働を最後の日まで実践していくためにも、カンファレンスの実施は必須である。

【まとめ】

今後はタイムリーなカンファレンスの実施と、デスカンファレンスの定着化を図り、ターミナルケアの更なる質の向上を目指したい。